67期リレーエッセイ

法の担い手として

会員　長谷川 福造

1　半年を振り返って

今年の1月に弁護士としての仕事が始まり，この原稿が掲載される頃には登録から約半年を迎える。去年までの手帳と見比べると，多様なスケジュールが色々と書き込まれていて，弁護士として少しずつ歩み始めたのだなという実感が湧いてくる。

修習時代に先輩法曹の方々から学んだ事柄の中で，強い印象を持っているのが「事実と向き合うことの大切さ」である。一つ一つの事件を構成している事実関係を丁寧に把握することで，紛争の問題点を明確化していくという趣旨である。実務の世界に飛び込んでみて，なかなか一筋縄では事実を把握できないことも多く，時として立ち往生してしまいそうなこともあった。そういった場面で道しるべとなったのが，先輩弁護士たちの職務での振る舞いやアドバイスである。

例えば，顧客との面談で，どういった視点で質問をしていけば的確に経緯を理解できるか，あるいは，書面を作る際にどのような点に注意を払うべきか等である。また，打ち合わせや期日の準備を事前にしっかり行うことの重要性も実感している。まだまだ駆け出しではあるが，熱意を持って日々の職務に取り組み，依頼者から信頼していただけるよう成長していきたい。

2　最近読んだ本

少しずつ仕事に慣れてきたゴールデンウィーク頃，ふと目に入って読んだのが，木庭顕『ローマ法案内―現代の法律家のために』（羽鳥書店）である。ロースクールの選択科目で「法曹の歴史」という授業を履修し，法の担い手の歩みに関心を持ったこともあり，とても楽しく読み進めた。

法の歴史の奥深さを再認識するとともに，人と人の繋がりは，いつの時代も大切なのだと改めて実感した。これから先，50年後・100年後の社会や法はどうなっているのだろう，といった想像もかき立てられ，とても刺激的だった。

3　将来に向かって

「あっという間」の半年間に思ったのは，趣味や息抜きの大切さである。修習の時に同期たちと一緒に市民マラソンに出場したのはとても楽しい思い出で，これからも定期的に練習してタイムを上げていきたい。

仕事に関しては，目的意識を持って行動することを実践していきたい。また，職務にとどまらず充実した研修を通じて，多くの先輩や同期と出会えていることにも感謝している。研修や仕事での経験を生かして，何年か後には自分たちが後輩の模範になれるよう，しっかりと精進していかねばと思う。

昨年，岐阜での修習期間中，毎朝通勤する際に車窓から見える田んぼの稲が日に日に成長し，ちょうど和光に行く頃，刈り入れを迎えたことをふと思い出している。水が張られて青空と白雲が一面に映し出された5月。緑のまぶしい若苗がぐんぐんと成長していった7月。実が大きくなるにつれて黄金色の稲が風になびくようになった9月。去年は，稲の成長とともに，一人の法曹として巣立つ歩みを重ねてきたように思う。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という気持ちで，引き続き日々謙虚に元気よく進んでいきたい。